

高野ムツ才選

使わない世界を信じ 武具飾る

長浜市 鹿達 熊夜

【評】五月の節句に武具を飾るのは子の健康祈願ゆえ。だが、武具は身を守るが攻撃の道具ともなる。実際に使用され続けている。不要となる未来への祈りがこもる。

この星に地政学あり半夏生

横浜市 鈴木 基之

【評】地政学は国の政策を風土や環境など地理面から研究する学問。ナチスの領土拡張政策に利用されたという。現代も同様の危険がある。

縄文の音色や確と草の笛

青森市 天童 光宏

【評】縄文人の土笛は青森県の遺跡からも出土している。草笛はむしろ不明だが、今と同じ音色の草笛を吹いていたとの想像は楽しい。

田植機のぐいと乗り出す水の色

日立市 菊池三三夫

見失ふことばかり増え柳絮飛ぶ

川口市 清正 風葉

田に水を張つて越後の国となる

埼玉県 小町 季生

ひんす居の屋根に青柿また落じる

奈良市 中島 澤

キャンパスを飛び出してゆく夏の蝶

小田原市 北見 鳩彦

代かきの首で実りの底力

桐生市 本間 久夫

黄金通問夫なき吾れと父なき子に

高槻市 黒田 豊子

正木ゆう子選

髪洗ふ意地張ることもいまは無く

神戸市 音羽 和俊

【評】「いまは」とは、年齢を重ねて、といつか。そのいさげは私もと思う読者は多いに違いない。若い時は意地を張らずにいられた。でも、張らない方が楽である。草刈つて四角に戻る畑かな

茨城県 杉山 満

【評】ずいぶんあっさりした句だが、実感だろう。草が茂って、周囲に食み出していたのが、四角に戻った。読んで、シンプルに、気持ち良い。臍の緒を伝はる祭太鼓かな

村上市 鈴木 正芳

【評】お腹に響く太鼓の音の振動は、胎児にも直に伝わりそうだが、「臍の緒を伝はる」が面白い。直でなく、間接的。全てが母体経由なのだ。植えし田を眺め尽くして農夫去る

旭市 斎藤 功

牛蛙鳴きて野池の揺るさびり

紀の川市 清原 一雄

残し置くくつや父の夏帽子

射水市 盛田まゆみ

地下足袋をそろへ八十八夜の朝

三郷市 吉村 喜子

呼び捨てる従姉の電話ホトトギス

鈴鹿市 岩口 巳年

春泥や野生はみんな眠なり

長野市 岡部 徹

春暑し麦の匂いのパン一斤

大分市 大島 芳子

小澤 實選

箱庭のバス停の名は「狐狸の里」

栃木県 あらあひとし

【評】箱庭に道がつくってあって、傍らにバス停留所の案内板が立つ。見ると「狐狸の里」と書いてある。待っている小さな人の顔も狐や狸。不思議な世界に誘われる。猫が尾を挙げ山棟蛇陸へ来る

町田市 谷川 治

【評】飼い猫が飼い主に捕えた獲物を自慢げに見せに来る。この際は、山棟蛇だった。「尾を挙げ」という描写がいかにも自慢げである。一車向遠足のせてやかましき

生駒市 国包 澄子

【評】電車の二車向に遠足の児童を乗せている。その児童たちがはしゃいでいるさういのだ。小学校低学年か。「遠足のせて」が端的な表現。父の日や父の写真はみな軍服

東京都 斎木百合子

汗匂ふ四人無言や昇降機

志木市 谷村 康志

空母へと向かふ坂道柿若葉

横須賀市 平野 雅夫

昭和の日悼む戦死者三百万

東京都 腰山 正久

筈の皮に値段の書かれあり

土浦市 平佐 悦子

黄沙降る昇降口の簀子にも

横浜市 我妻 幸男

憲法記念日健啖なる友よ

東久留米市 飯山徳次郎

津川絵理子選

道をしへ振り向きながら親の顔

南房総市 山根 徳一

【評】斑猫の習性をユニークな視点で捉えた。親が「こっちはだよ」と振り向いて、待っていてくれた思い出が重なる。「親の顔」が懐かしく、子供時代へ導いてくれるよう。大学の静けさにあり夏木立

東京都 松永 京子

【評】広いキャンパスなのだろう。学生は多いが全体的に静かで、夏木立が美しい。「夏木立」によって大学の景色が想像できる。フランスの皿に載せたる梅かな

会津若松市 佐藤 秀子

【評】大きくて美味しそうなお母。それを綺麗な皿に載せる。フランス製の美しい磁器なのだろう。ちょっと気取った感じがあって面白い。ふるりの麦に呼ばれてバスに乗る

行田市 吉田 春代

青竹も葉蘭も器夏料理

白井市 毘舍利愛子

若冲図書し雪舟図涼し

八王子市 徳永 松雄

Aに教はりもして薬狩

宝塚市 広田 祝世

動くたび関節が鳴る羽抜鶏

東京都 川瀬 佳穂

脚捨ててががんばの影まをまらさず

東京都 望月 清彦

螢火は螢火求め舞い上がる

明石市 北前 波塔